



森コラム 45

街路樹

理事長 森 勉

この原稿提出の締め切り3月末、幸手市権現堂の満開の桜並木を歩きながら街路樹について考えてみました。世界最古の街路樹はすべての道はローマへ通じると言われた古代ローマのアップピア街道等に植栽されていたのではありませんが、約3千前にインドのコルカタからアフガニスタン国境にかけてヒマラヤ山麓に造られた幹線道路に三筋の並木が連なっていたそうです。中国では約2千5百年前の周の時代に壮大な街路樹が植栽されており、わが国では6世紀後半の敏達天皇の頃に難波の宮にクワが植えられていたようです。

現在のわが国には、沖縄備瀬のフクギ並木、日光街道の杉並木、明治神宮外苑の銀杏並木、滋賀県マキノ高原のメタセコイア並木、弘前市百沢のオオヤマザクラ並木、京都嵯峨野の竹林の小径等一度は尋ねてみたい美しい並木があります。私がかつて勤務した熊本市では各通りに老木の楠、銀杏、桜の街路樹が植栽され城下町の落ち着いた雰囲気醸し出しており大変感動しました。また、私の終の棲家の上尾市周辺で

は春から夏にかけて淡紅色や白色の花をつける花水木や百日紅の並木が整備されており人々の心を和ませています。

わが国における花水木は大正時代当時の東京市長であった尾崎幸雄が米国のワシントンDCへ桜を贈った返礼として60本贈られたのが始まりで当時の原木は都内の高校の校庭に僅かしか残っていないそうです。余談ですが、イエス・キリストが掛かった十字架に花水木が使われたため、以前は大きかった木は小さくなり、花は四弁で十字架に似ており、花卉には釘を刺された傷跡があるという伝説が米国にはあるそうです。これは新しい伝説で聖書には書かれておらず花水木は北米原産でイスラエルには自生していません。

江戸時代にオオシマサクラとエドヒガンを交配して作られた染井吉野は樹齢数百年の古木・銘木の山桜やしだれ桜と異なりその寿命は人の一生に似て90年前後ですが花の美しさに魅せられ明治以降瞬く間に全国に植栽されわが国を象徴する街路樹になりました。ワシントンポトマック河畔の染井吉野は日米友好・親善の証として観光スポットとして賑わう一方隣国では染井吉野の起源や扱いについて無粋な喧しい議論があるそうですがわが国の春は桜前線の北上と共に列島は桜色に染まり人々は花を愛で、花より団子と飲み歌い、散り行く花に人の世の儂さを感じる大切な年中行事となっています。